

## 着付け教室の體驗

一二三朋子

この七月より、着付け教室に通ひ始めたり。日本人たるもの、いつかは自らの手にて帯を結び、日常的に和服を着こなすことに憧れるれど、なかなか始まるきつかけもなかりき。なれど、昨年より茶道を習ひ始め、初釜や茶会に参加するにつけ、和服への憧れ抑へがたくなりぬ。和服も持たず、旅館の浴衣さへ身に着けむとすれば着崩るるの悲しさに、初心者教室に申し込めり。初めは先生の手の向きと言ひ、動きと言ひ、我が爲す所と齟齬を來たし、我が不器用さに腹立たしくも情けなくも覺ゆれど、やうやう八回の稽古と修了試験を終へぬ。次は和服を買はむと、値段の相場を調べむため、百貨店の呉服賣り場に立ち寄りしとき、三带式着物なるものを見つけたり。着物の上、下、おはしよりと三つに分かれ、それぞれ體に巻き付くるなり。帯もお太鼓と體に巻く部分とに分かれをり。着付けは不要にて、五分にて着ることを得との由。いかに簡便に着るを得むとも、着付け叶はざれば空し。自ら着付けするこそ和服の醍醐味ならめ。

(令和四年十月十三日受附)